



Title	「かからむとかねて知りせば」
Author(s)	澤瀉, 久孝
Citation	懷徳. 1954, 25, p. 7-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90273
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「かからむとかねて知りせば」

澤 瀉 久 孝

如是有刀（乃）豫知勢婆 大御船 泊之登萬里人 標結麻思乎（卷二、一五卷）額田王
右の歌は萬葉集卷二、挽歌の中「天皇大殯之時歌二首」と題されたうちの一首で、天智天皇崩御の後、天皇の寵を得てゐた額田王の作であるが、その初二句の訓義について諸説があるのでその事を考へてみたい。

原文西本願寺本以下の諸本には如是有乃豫知勢婆とあつてカカラムトカネテシリセバと訓まれてゐた。然るに金澤本、類聚古集、古葉略類聚鈔の三古寫本には「豫」の字「懷」とあつてオモヒと訓まれてゐる。紀州本には「預」とあつて、右にオモヒと訓じ、左にカネテイとある。代匠記は流布本により乃を刀の誤としたが、刀は所謂甲類の假名であり、助詞「と」は止、跡、登など所謂乙類の假名を通例とするところから、金澤本などの文字によりカカラムノオモヒシリセバといふ訓が提出せられ、又類聚名義抄（法中）には懷の諸訓の最初にコ、ロとあるによりカカラムノコ、ロシリセバの訓も提出せられるに至つた。上代假名遣に忠實に、現存のうちの最も古い寫本を尊重するといふ意味では右の新訓は最も學問的な慎重な説のやうに見える。しかし助詞「と」の假名は既に早くより混亂がはじまつてゐたやうで

衾道乎 引手乃山爾 妹乎置而 山徑往者 生跡毛無（卷二、二二三）
の或本の歌には

「かからむとかねて知りせば」

「かからむとかねて知りせば」

八

衾路 フスマヂラ 引出山 ヒキデノヤマニ 妹置 イモテサキテ 山路念違 ヤマヂサヲワニ 生刀毛無 イクエトモナシ (同、二一五)

とあり、「生刀毛無」とあるので、その訓詁について従来異論を生じてゐるが、兩者を對照してやはりイクエトモナシと訓むべきもので、乙類の「跡」と甲類の「刀」とが同時に用ゐられてゐたと認むべきである。従つて今の場合も「刀」の誤と考へる事は可能である。

次に「むの」といふ言葉のつゞきについては武田裕吉博士の全註釋に

丹波道 たにはち の大江の山のさなかつら タニハチ 絶牟乃心 タケムノココロ 我が思はなくに (卷十二、三〇七)

谷せばみ峯にはひたる玉かつら タニハチ 多延武能 タニハチ 已許呂 タニハチ 我が思はなくに (卷十四、三五〇七)

の例があげられてゐる。なる程それによると「むの」といふ用法があるといふ事は認められるけれども、「むの」の接續が同様だから「かゝらむの心」といふ句もあつてよいと考へるのは少し輕率である。「絶えむの心我が思はなくに」は「絶えむと我が思はなくに」とその意味が同じだと云へるから、不用意に考へると「かゝらむの心(思ひ)(を)知りせば」も「かゝらむと思ひ(かねて)知りせば」も同じやうに見えるかと思ふ。しかしさうではない。何故か。

「絶えむ」といふ心の主は「思はなくに」といふ同じ人間である。「絶ゆ」は「逢ふ」とか「行く」とかいふ語と同じく、人間の意志を伴ふ言葉であつて、「絶えむの心」「逢はむの思ひ」「行かむ心」などをうけて「思ふ」とか「持つ」とかいふ事は極めて自然に認められる。しかし「咲く」とか「散る」とか「満つ」とかいふ語になると、その主語は「花」となり「もみぢ」となり「潮」となつて、人間の意志を離れた客觀的な事象を述べる言葉といふべきで、もし「咲かむの心」「散らむ思ひ」といへば、その心(思ひ)の主は「花」であり「もみぢ」であつて、「散らむの心」を知りせば」といふ事と「散らむと知りせば」とは同じではない。前者は花の心を知る事であり、後者は花の散る事實を知る事となる。「かからむ」は「かくあらむ」であり、「かくある」はやはり客觀的事實である。即ち今の場合に於てはめれば天皇の崩御せられた事で、それは人間の意思を超えた事實である。だからもし天皇が崩御せられ、今現

にかくあるやうな悲しい心といふのを單に「かくある」と云つたのだとすれば、それは「かかむの心」といふべきである。「老なみに如此戀にも吾は逢へるかも」(五五九)「如是念にあはましものか」(六二〇)のやうに。さうでなくて「かからむの心」といふ以上は、右の「散らむ心」といふに同じく、天皇御自身が死を意圖せられた事になり、さういふ事が認められれば「かからむの心知りせば」といふ句もうなづかれるが、その心は天皇の御心であつて、知る主の心ではない。従つて「かからむの心知りせば」と「かからむと思ひ知りせば」とは同じでない。即ち今は人間の意志を超えた崩御の事實をかねて知つてゐたならば、といふのであるから「かからむの心知りせば」では穩當でなく「かからむと思ひ(かねて)知りせば」でなければならぬのである。金澤本その他の古本に本文は「乃懷」とあり懷はオモヒと訓みながらも、初句はカカラムノとせず、カカラムトとしたのは「かからむの思ひ」の語に落ちつきかねた事を示すものである。さて初句カカラムトと決定すると次の「懷」としてもコ、ロと訓む事は當然不可となり、オモヒと訓むにしてもそれは動詞となる。そこで「懷」の文字によりオモヒと訓むか、「豫」又は「預」の文字によりカネテと訓むか、という事が次の問題となる。

かからむとかねて知りせば

かからむとおもひ知りせば

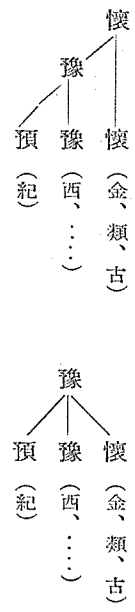
この兩句を較べると調子から見ても意味から云つても前者を可とすべき事はまづ誰も認めるところであらうと思ふが、オモヒと訓んでも意味は通ずる事と現存の三古寫本に「懷」とあつて訓もオモヒとある事とは一應考慮の必要を感じさせる。

金澤本の文字については「校勘資料としての金澤本」(萬葉の作品と時代所収)の小稿中に述べておいたやうに、他の古寫本と共に流布本の誤を訂正すべき點は少くないが、金澤本のみによつて訂正すべきものは存外少く、桂本に比しては原本の文字の形が崩されてをり、他本には正しく傳へたと思はれる文字が本書にのみ誤つたと思はれる處も決し

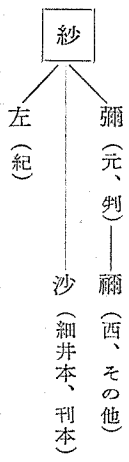
「かかむらとかねて知りせば」

「かからむとかねて知りせば」

て少くなす。近ところにて一例をとつても（一五五）に「和期大王」の「和」を「知」に誤り、「畫者」の「畫」を「書」に誤つてをり、（二九七）の長歌の如きは金澤本にのみ誤つた文字が數ヶ處に及んでゐる。夫々金澤本と類聚古集とに共に誤つた例も多く、たとへば右の（二五五）の中にも「夜之盡」の「盡」を「書」に誤り、「吾勢祐」（二〇五）の「祐」を「祐」に、「羽易乃山」（二一〇）の「易」を「見」に誤つたのも金、類二本にのみ共通の誤である。かういふ風に見來ると「懷」とあるものが、金、類、古の三本で、現存諸本中では最古のものである爲に、それが最も信頼すべきもののやうにも考へられるのであるが、今述べた誤字例を考へると、この「懷」を必ずしも原文の文字とは斷じ難いのである。殊に流布本系のものいづれも「豫」とある事と天治本の流を汲む紀州本には「預」とある事、そしてその二つともにカネテと訓み得る事、又「懷」の文字は集中の歌の文字としては用例なく、豫と預とは用例多く、一本に豫とあるものが他本には預とある例（一九六、六五九、一七三八、二六九〇）もある事などを考へると、懷が豫に豫り更に預ともなつたと見るよりも、豫が預とも書かれ、一方には懷と誤つたと見る、即ちこれを圖式に示すと



の前者でなくて後者と見る方が自然だと思はれる。それは「伊理比沙之」（二五）の「沙」が元暦本、類聚古集には「彌」とあり、西本願寺本等には「彌」とあり、紀州本に「左」とあるが、これは原本には「紗」とあつたもので、それが



の如き變更を見た（萬葉古徑三所收拙稿參照）のと極めて似た道を通つたものといふ事が出来よう。豫と懷とは今日の活字では類似の點が少いやうであるが、草體の文字としては相當接近し得る字體である。即ち扁の予は草體としては三水の草體とも似、従つて又立心扁の草體とも混同する可能性があり、旁の象は~~ふね~~とも書かれ、裏の草體~~ふね~~と極めて接近するのである。かうして豫が懷と誤つた事は十分認められるのである。

又一方に句として「思ひ知りせば」としても意味の通ずる事は右に述べたが、「かねて知りせば」の方が初句との連續の上から更に適切なものとなる事も既述の如く、用例としても「思ひ知りせば」の句は萬葉にも後の勅撰集にも例なく、「かねて知りせば」は集中に他に三例あり、後の集にも

行末を契りしよりぞ恨みましかりともかねて知りせば（新後撰卷十六）基忠

その他の例があり、特に家持が弟の死を聞いて詠んだ哀傷の歌

可加良牟等 可禰底思理世婆 越の海のありその浪も見せましもを（卷十七、三九五九）

のある事が注意せられる。この家持の作は

悔しかも可久斯良摩世婆青丹よし國內ことと見ませしものを（卷五、七九七） 憶良

を模したものともいふ事が出来るが、同時に夫々更に溯つてその先蹤を額田王のこの作に求めてゐると見るべきであらう。少くも前代の女流歌人として高名のこの人の作と家持の作とが無關係であつたとは考へられない。だとすればこれこそ今の初二句が家持の見た頃には「如是有刀。豫。知勢婆」とあつた事を最も有力に語る傍證とする事が出来よう。

以上述べ來つたところにより初二句の訓はカカラムトカネテシリセバと決定し、かういふ事即ち崩御の事があらうと前から知つてゐたならば、の意に解すべきである。一首の大意は

このやうな事にならうと前から知つてゐたならば、大君の御舟の停泊した湊に標繩を結びめくらしして御舟をおと

「かからむとかねて知りせば」

「かからむとかねて知りせば」

一一

め申しませうものを。

とならうか。

この歌新拾遺集（卷十）に

かかしむと思ひしもせば大舟の泊つるとまりにしめゆはましを

として採られてゐる。金澤本と同じ系統の本から採られたものと思はれ、しかも既に假名書にせられたものが行はれてゐて、それが更に語句の變更を來さしめたものと思はれる。

この春松山市に於ける萬葉學會の講演會で右の小見を述べたところ來聽の村上清氏その他二三氏より、後醍醐天皇の第二皇子懷良親王その他名乗として懷はカネと訓まれる字故そのまゝでカネテと訓めないかといふ説を申出られた。懷をカネと訓むこと觀智院本類聚名義抄（法中）に懷に「カネタリ」の訓が見える。圖書寮本には見えない。この字の訓は兩本に出入があり、たとへばはじめに引用したコ、ロの訓も觀智院本にあつて圖書寮本にはない。その反對にウダクの訓は圖書寮本にあつて觀智院本にはない。少くもこの文字の訓としては圖書寮本が古訓を存してゐるやうであり、懷をカネと訓むこと上代まで溯ることは疑問であり、やはり誤字説によるべきものと考へられる。

（昭和二九、八、一二、稿）